



合同演奏

男声合唱組曲 「富士山」

I. 作品第壹
II. 作品第肆
III. 作品第拾陸
IV. 作品第拾捌
V. 作品第貳拾壹

作詩 草野 心平
作曲・指揮 多田 武彦

合同演奏指揮 多田武彦

指揮者プロフィール

多田武彦(60才)、1930年大阪に生まれる。

旧制大阪高校一年(1947年)のとき、先輩の田中信昭氏(現東京混声合唱団常任指揮者)に誘われ、コーラス部に入部。無伴奏合唱曲の虜になり、このことが後になって、専ら、無伴奏合唱曲を作曲する動機となる。

1953年京大法学部卒業後は、映画監督への夢を捨てて銀行に就職、融資畑を歩み、いくつかの上場会社に役員として出向、会社再建に尽力。

平日は勤務先の仕事に専念し、作曲は「スケッチは通勤電車の中、浄書は休日に家で」という枠組みの中でおこない、今まで60以上の合唱組曲(曲数にして約380曲)を作曲。氏の特色は、作曲家故清水脩氏の薫陶による「詩の厳選」。永年の間に、多くの読者によって選び抜かれた詩の中から、さらに「詩自体に音楽がある詩」を選び、これを基に組曲としての起承転結を考えながら構成し、「これらの詩の持つ音楽」に寄り添うように作曲をする、といった作曲技法を、頑なに遵守して来ており、処女作の「柳河風俗詩」(1954年作)以来、氏の多くの作品が愛唱され続けて来た所以となっている。

今宵の演奏について

今回、関西六連の諸君のご好意で、自作自演の機会を与えられた。関西六連からは今までも二度お誘いをいただいたのに不義理をしてきたので、今回は出させていただくことにした。四十年前の学生に戻ったつもりで、関西六連の学生諸君と、今はもう故人となられた草野心平先生のあの笑顔を思い出しながら、精一杯「富士山」を歌い上げてみよう。

多田武彦



合同演奏

7th stage

男声合唱組曲

富士山

男声合唱組曲「富士山」について 多田武彦

1953年11月から翌年の2月まで、月に一度来阪される清水脩先生に、私は対位法を教わった。二回目のレッスンのとき、先生は「何か習作を作って来なさい」と言われた。

このときの習作が、処女作の、組曲「柳河風俗詩」である。清水先生は「この組曲は、それなりに良く纏まっていますが、歌い手の声域を気にし過ぎている。男声合唱曲は、もっとスケールの大きい、ダイナミックなものにしなければいけない」とおっしゃった。

清水先生のこの助言に従って、1956年に作曲したのが、組曲「富士山」である。当然、グリークラブ泣かせの作品となり、初演後は余り歌われなかった。1960年代に入ってから合唱団の技術水準も高まり、また合同演奏で採り上げられる機会が多くなりだして、組曲「富士山」はやっと動き出した。今にして思えば、清水先生は、男声合唱の持つ「繊細さと力強さ」の両極の必要性を、私に教えられたのであろう。

清水先生のこうした薫陶のおかげで、作曲してから35年間、多くのかたがたに愛唱していただいた。またこれを契機に、心平先生の詩を愛読されるかたがたも増えていった。

詩集「富士山」で草野心平先生は、「富士山を取り巻く自然の風物・そこに生きる動物や人間・様々に揺れ動く人々の心」を、あるときは冷徹に、あるときは温かい眼差しを以て、描いておられる。

詩を読む人の側にも、詩集「富士山」に対する様々な念おもいがあった。私の後輩で、若くして亡くなられたTさんは、生前、勤務地の清水市から富士山を見ていた。彼は、作品第拾陸の「存在を超えた無限なもの／存在に帰る無限なもの」の行くだりが好きだった。富士山を見る度に、この言葉を、自分自身と富士山とに投影させていきたいのであろう。

私も心平先生の詩に魅せられ、「富士山」のあと、1961年に「草野心平の詩から」（慶応義塾ワグネルソサイエティ男声合唱団）、1968年に「北斗の海」（早稲田大学グリークラブ）、1969年に「蛙」（立命館大学メンネルコール）、1980年に「蛙・第二」（東京六大学合唱連盟）、1983年に「草野心平の詩から・第二」（京都産業大学グリークラブ）、1987年に「草野心平の詩から・第三」（関西大学グリークラブ）、の男声合唱組曲を作曲している。（括弧内は初演団体。「富士山」の初演は、京都大学男声合唱団）

心平先生の詩は、男声合唱音楽に、実に良く解け合う。そしてその表現は多彩である。「富士山」の「作品第壹」や、「第貳拾壹」に見られる構築性の大きいものがあるかと思うと、「草野心平の詩から」の中の「雨」のような凝集美もある。同じく「草野心平の詩から」の中の「金魚」のようなオーバーラップ方式もあれば、「さくら散る」に見られる抽象画もある。「北斗の海」の「Berling-Fantasy」の荒々しさもあれば、「富士山」の「作品第肆」の繊細な描写もある。「蛙」の「黒い蛙」の幻想性と「五匹のかえる」との諧謔性の対比も、興味深い。

こうした多彩な表現と、それを縫い合わせていく言葉のつながりを、そのまま男声合唱に置き換えていくと、そこに草野心平の詩と音楽の個展が開かれる。